

第十章 労働と資本、職業別の賃金と利潤（一）

同じ地域では、労働や資本の使い道による得失は原則として均衡し、差が生じても常に平準化へ向かう。もし明らかに得な職や運用先、または損なそれがあれば、人は前者に集まり後者から離れ、利得はやがて他と同水準に戻る。少なくとも、物事を自然のなりゆきに委ね、自由が徹底し、各人が適当とみなす職を選び、望むときに転じられる社会では、そうなる。人は自己の利益に従い、有利を求め、不利を避けるからである。

実際、欧州では、労働や資本の向け先が異なれば、賃金や利潤に大きな差が生じる。ただし、その理由は、各職業に固有の事情が現実には、または少なくとも人々の認識の中で、ある職の低い金銭的報いを補い、別の職の高い報いを打ち消すこと、そして欧州の政策がどこでも完全な自由放任を認めていないことにある。

これらの事情と前述の政策を個別に検討するため、本章は二部に分かれる。

第一部 各職の性質に基づく不均衡

私の見立てでは、次の五つが、ある職では小さな金銭的報いを補い、別の職では大き

な報いを打ち消す主な要因である。第一に業務自体の快・不快、第二に習得の容易さと費用の高低、第三に就業機会の継続性、第四に従事者に託される信頼の度合い、第五にその職で成功する可能性の高低である。

第一に、賃金は、仕事の楽さ・きつさ、清潔さ、社会的名誉の有無によって左右される。多くの土地で、通年では、仕立て職人の稼ぎは織り職人より少ない。仕立ての方がはるかに容易だからである。織り職人の稼ぎは鍛冶職人より少ない。必ずしも楽ではないが、はるかに清潔だからである。鍛冶職人は熟練工だが、十二時間働いても、単純労働の炭鉱労働者が八時間で得る額に届かないことがしばしばある。鍛冶は汚れや危険が少なく、日中の地上で行われる仕事だからだ。名誉は名誉職の重要な報いを成し、金銭に限って総合的に見ると、これらの職の収入は総じて低く抑えられていることを後段で示す。これに対し、不名誉は逆に働く。屠畜・食肉処理業は残酷で嫌われるが、多くの場所では一般の商いより実入りがよい。最も忌むべきとされる公的な死刑執行人は、出来高で見れば、どの一般職よりも高い支払いを受けている。

社会の初期には狩猟と漁労が人類の最重要の仕事であったが、社会が発展・成熟すると最も好まれる娯楽となり、人々はかつて必要に迫られて行っていたことを、いまは余

暇のたしなみとして行う。したがって発展した社会では、他人が余暇に楽しむことを生業とする者はたいてい貧しい。漁師は古代ギリシアの詩人テオクリトスの時代からその典型であり、英国でも密猟者はどこでもたいへん貧しい。しかも、密猟を認めない厳罰の国でさえ、免許猟師の暮らし向きはさほど良くない。こうした職への自然な嗜好が、ゆとりある生活を営める人数を超えて人を呼び込み、その産物は量の割に常に安く売られるため、働き手にはごくわずかな収入しか残らない。

不快さや不面目は賃金と同じ仕組みで資本の利益にも作用する。たとえば宿屋や酒場の主人は、家を常に客のために開け、酔った客の横暴に耐えねばならず、自分の家を思いどおりに扱えない。快い仕事でも名誉ある仕事でもない。それでも、少ない元手でこれほど大きなもうけが得られる普通の商いは、ほとんどない。

第二に、賃金は、その職の習得の容易さと学ぶ費用の多寡によって左右される。

高価な機械を据え付ける際には、その摩耗に至るまでに生む追加の成果によって、投じた資本が少なくとも標準的な利益付きで回収できることを見込む。同様に、際立つ器用さと技能を得るために長い時間と多大な労力を投じて教育を受けた人も、いわば高価な機械に等しい。その人の仕事は、一般労働の賃金に上乘せされる収入によって、教育

費の全額を、同額の資本が通常得る利益とともに償還できねばならない。しかも、人の寿命はきわめて不確かであるから、機械の比較的確かな耐用年数と同様の考えに立てば、その回収は合理的な期間内に達成される必要がある。

熟練労働と非熟練労働の賃金差は、この原理に拠る。

欧州の制度では、職工・工匠・製造業の仕事は熟練労働、農村の仕事は普通労働とされ、前者がより繊細で高度だと想定される。これは事例によつては当てはまるが、一般にはそうでないことは後段で示す。この前提のもと、前者に就くには徒弟制度が課される一方、後者は原則として誰にでも開かれている。徒弟期の労働の成果はすべて親方に帰属し、生活費は多くの場合親や親族が負担し、衣服もおおむね家族持ちである。技術料として親方に金銭を納めるのが通例で、払えない場合は年季を延ばして補う。見習いは怠けがちとも言われ、これは親方側に常に有利とは限らないが、見習い側には一貫して不利である。これに対し農村労働では、易しい作業をこなしながら難しい工程を学び、その間も各段階で自らの稼ぎで生計を立てる。したがって、職工・工匠・製造業の賃金が普通労働者より幾分高いのは理にかなっており、現実にもそうで、そのため多くの土地で上位の身分と見なされる。ただし差は総じて小さい。麻布や毛織物など一般的な製

造の職人の平均的な日給・週給は、普通労働の日当をわずかに上回る程度で、雇用が比較的安定するため通年の収入はやや多く見えるものの、結局は高い養成・訓練費用の補填に見合う程度にとどまる。

技巧を要する美術・工芸や、法・医のような高等専門職の教育は、いつそう長期にわたり費用もかさむ。ゆえに、画家や彫刻家、弁護士や医師の金銭的報いは手厚いのが妥当で、現実にもその通りである。

資本の利益は、投資先の商いを覚える難しさの影響をほとんど受けない。大都市で一般的な資本運用は習得の難しさがほぼ等しく、対外・国内の貿易を問わず、特定の部門だけが突出して複雑ということは考えにくい。

第三に、職業ごとの賃金は、雇用の継続性・安定度によって左右される。

職種によって雇用の安定は大きく異なる。多くの製造業では、職工は働ける日なら一年のほとんどで仕事があるが、石工やれんが積みは厳寒や荒天では作業できず、平時でも顧客の臨時の注文がなければ仕事が途切れがちである。ゆえに、働ける日に得る賃金には、非就業期の生活費のみならず、不安定な身分がもたらす不安や落胆への補償も含まねばならない。このため、製造部門の職工の稼ぎが一般労働者の日当とほぼ同じ地

域では、石工・れんが職の賃金はふつう一・五〜二倍に達する。たとえば、一般労働者が週四〜五シリングの場所では七〜八、六なら九〜十、ロンドンのように九〜十なら十五〜十八が相場である。もともと、石工やれんが積みは熟練職の中でも習得が容易とされ、ロンドンでは夏季、セダン椅子の担ぎ手が臨時にれんが職として雇われることもある。したがって彼らの高賃金は、技能への対価というより、雇用の不確実性への補償と見るべきである。

家屋大工は石工より繊細で技巧と工夫を要すると見なされがちだが、多くの地域では日当はやや低い（例外はある）。顧客の臨時の注文に一定の影響は受けるものの全面的に依存せず、天候による中断も少ないためである。

通年で働けるはずの仕事でも、地域によってはそうならず、その場合、賃金は一般労働より大きく割高となる。ロンドンでは、多くの職工の雇い職人が、地方の単純日雇い同様、親方の裁量で日や週ごとに雇われたり外されたりする不安定な立場に置かれる。最下層とされる仕立ての雇い職人でさえ日当はハーフクラウン（二シリング六ペンス）で、一般労働の相場は十八ペンス（二シリング六ペンス）にとどまる。一方、小都市や農村部では仕立て職人の賃金は一般労働者とはほぼ同じだが、ロンドンでは、とりわけ

夏季に、しばしば数週間にわたって失業する。

雇用が不確実で、かつ仕事が過酷・不快・不潔であれば、最も単純な労働でも熟練工を上回る賃金となりうる。ニューカッスルでは出来高制の炭鉱労働者が一般労働の約二倍、スコットランドの多くでは約三倍を得る。高賃金の理由は仕事の厳しさと不快・不潔さにあるが、彼らの雇用の継続自体は多くの場合、本人の意向でかなり安定させられる。他方、ロンドンの石炭荷揚げ人夫は過酷さと汚れ、不快さでは炭鉱に匹敵し、石炭船の入港が不規則なため雇用は必然的に不安定である。ゆえに、炭鉱労働者が常時二・三倍を得るなら、荷揚げ人夫がときに四・五倍を得ても不自然ではない。実際、数年前の調査では日当六・十シリングに達し、六シリングはロンドンの一般労働の約四倍であった。およそ独占のない業種では、最も低い「普通の稼ぎ」が多数の標準と見なされ、仮に相場が不利な条件を補ってなお余るほどに高ければ、参入が殺到して賃金は速やかに切り下がる。

雇用の安定度は、どの業種でも資本の通常利潤に影響しない。資本を継続して運用できるかは、業種の性格ではなく、それを運用する商人・経営者の手腕で決まる。

第四に、賃金は、職務で従事者に託される信頼の大きさによって上下する。

金細工師や宝飾職人の賃金は各地で多くの職人を上回り、同等の腕の相手はもちろん、より高度な技能の職人よりも高いことすらある。扱う貴金属や宝石などの素材がきわめて高価で、それを託される責任が重いからである。

私たちは、医師には健康を、弁護士や法務代理人には財産、ときには生命や名誉までを委ねる。このような厚い信頼は、極端に低い境遇の人には安心して託せないため、その重責に見合う社会的地位を保てるだけの報酬が必要である。さらに、長期の教育と多額の費用が不可欠であるため、彼らの賃金水準は必然的に高くなる。

自己勘定のみで商うかぎり、他人の財産を預かる信託関係は生じない。信用の厚薄は業種ではなく、その商人の資産の厚み・誠実・慎重さという世評で決まるゆえ、各取引部門の利潤率の差を商人への信頼度の違いに帰することはできない。

第五に、職業別の賃金水準は、その職で成功する見込みの大小に応じて上下する。

教育で身につけた職に実際に就ける見込みは、職によって大きく異なる。多くの手工業は成功がほぼ確実だが、自由業はきわめて不確実である。子を靴職人に弟子入りさせれば靴を作れるようになる可能性は高いが、法律を学ばせても、職として食べていける水準に達するのは二十人に一人ほどである。宝くじが完全に公正なら、当たりは外れの

損失をすべて補う額でなければならない。同じ理屈で、二十人が失敗して一人が成功する職なら、その一人は残り二十人分まで受け取ってよいはずだ。四十歳前後になつてようやく稼げるようになる法廷弁護士は、本来、長く高価な自分の教育費に加え、結局稼げない二十人分の教育費まで報われるべきだが、どれほど法外に見える手数料でも、現実にはそこまで届かない。試みに、ある地域で靴職人や織工など一般の職工の年間総収入と総支出を合算すれば、多くの場合は収入が上回る。他方、法曹院に属する弁護士と法学徒全体で同じ計算をすると、年間収入は支出に比べごく小さな割合にとどまる。収入を高めに、支出を低めに見積もつても結果は変わらない。ゆえに「法律という宝くじ」は公正からほど遠く、ほかの多くの自由で名誉ある職と同様、金銭面の報いは明らかに不足している。

それでも、こうした自由で名誉ある職は、多くの制約があつても他の職と釣り合いを保ち、高潔で開明的な人々が進んで志す。動機は、卓越に伴う名声への希求と、能力のみならず自らの幸運まで信じる生来の自己信頼の二つである。

平均に達する人すら稀な領域で秀でることは、天才の確かな証である。そうした卓越にはつねに世間の称賛が報酬の一部として伴い、その度合いが高いほど比重も増す。医

療ではこの無形の報いの割合が大きく、法律ではおそらくそれ以上に大きい。詩や哲学では、報いのほとんどが名望である。

人を惹きつける美しく心地よい才能は、それを有するだけで称賛される。だが、それを糧とする行為は、理性から見ても偏見から見ても「公然たる自己の商品化」と受け取られがちである。ゆえに、この才能で生計を立てる者の報酬は、習得に要した時間・労苦・費用に加え、職業として用いることに伴う不評・不名誉の補償まで含む水準であるべきだ。俳優や歌劇の歌手・舞踊手に法外な報酬が支払われるのは、才能の希少で美しい性質と、その使い道にまわりつく汚名という二因による。一見、人柄を蔑視しながら才能には惜しみなく払うのは矛盾のようだが、蔑視を容認するかぎり、高い補償は避けられない。世論や偏見が改まれば、志望者が増え、競争が報酬をたちどころに切り下げる。もつとも、こうした才能は凡庸ではないが、想像されるほど稀でもない。高い資質を備えながらこの用途を潔しとしない者も多く、名誉が損なわれぬなら、これを身につけうる人々はさらに増えるだろう。

人は自らの能力を過大に見積もりがちであるという古い弊は、古来多くの哲学者・道徳家が繰り返し指摘してきた。他方、幸運を当て込む根拠なき自信はあまり論じられな

いが、実際にはそれ以上に普遍的である。健康で気力があるかぎり、この確信から完全に自由な者はほとんどいない。人は多くの場合、利得の機会を大きく、損失の危険を小さく見積もり、健全な者で損失の可能性を必要以上に重く見る例は稀である。

人は利得の見込みを過大評価する。その最も雄弁な証拠が宝くじの普遍的成功である。主催者に益が残らぬ以上、総当せん金が総購入額に等しい「完全に公正な宝くじ」は、過去にも未来にも成立しない。国営宝くじの券は期待値が価格に及ばないのに、市場では通常二〇三割、時に四割の上乗せで流通する。需要を支えるのは、高額当せんへの空しい希求のみである。最も分別ある人でさえ、一万〇二万ポンドの当たりを狙って小金を払うのを愚としない。たとえ、その小金が期待値に比し二〇三割も割高だと知っていても同じである。最高賞が二十ポンドを超えぬ宝くじなら、他の点で通常の国営宝くじより公正に近くとも、同様の需要は起こらない。当せん確率を高めようと幾枚も買う者もあれば、さらに多数の券に小口で持ち分を分散する者もある。だが、数字の確かな命題の一つは、購入枚数が増えるほど損失に傾く確率が高まり、すべての券を買えば損は必定で、保有枚数が多いほどその確実性に近づく、ということである。

人は損失の見込みをたいてい過小評価し、過大に見積もることは稀である。この傾向

は、保険業の利益が概して薄いことにも表れる。火災や海上保険が産業として成立するには、標準的な保険料が平均損害と運営経費、さらに同額の資本を別の通常の商いに投じた場合に得られる通常利潤まで賄わねばならない。この水準しか払わない加入者は、リスクの実勢価格、すなわち合理的に期待できる最低額だけを負担しているにすぎない。保険で小利を得ることはあっても巨富を築く例は稀であり、これだけでも保険の平常時の損益が他の商いに比して特段に有利ではないと知れる。それほど保険料が妥当であるにもかかわらず、多くの人はリスクを軽んじて加入を嫌う。王国平均では、火災保険に未加入の住宅が二十軒中十九軒、むしろ百軒中九十九軒に及ぶ。海上の危険はより切迫して感じられるため船の加入率は高いが、それでも多数の船が四季を通じ、戦時でさえ無保険で出航する。二十〜三十隻を保有する巨大商社や大商人なら、艦隊内で損失を相殺する事実上の自己・相互保険が働き、節約した保険料が通常の損失を上回ることもある。とはいえ、家屋や船舶を無保険にする判断の多くは、こうした精緻な計算の結果ではなく、無思慮・軽率・過信とリスク蔑視の所産である。

若者が職業を選ぶ頃には、危険を軽んじ成功を過信する傾向が最も強い。しかも、不運への恐れが幸運への期待を抑えきれないこの弱さは、上流層の自由業志向の熱意より

も、庶民が兵役に志願したり航海に出たりする身軽さに、いつそうはつきり現れる。

一般兵が失うものは明らかである。それでも、新たな戦の始まりほど、若い志願者が危険を顧みず進んで入隊する時はない。昇進の望みはほとんどないのに、若い想像力は現実には訪れない榮譽や名声・出世の機会を無数に思い描く。結局、その夢想だけが彼らの血への唯一の対価となる。にもかかわらず、賃金は一般の労働者より低く、実戦の労苦ははるかに重い。

海の「宝くじ」は陸軍ほど不利ではない。まじめな労働者や職工の子が海に出ることには、父の承諾があればしばしば同意が得られるが、兵役志願となると承諾はほとんど得られない。周囲は海の仕事には一定の成功の芽を認める一方、軍隊で報いが得られると信じるのは当人だけである。榮譽においても、偉大な提督は偉大な將軍ほど崇められず、海軍で最高の成功を収めても、陸軍の同等の成功ほど名誉も富も大きくない。この差は下位の昇進にも及び、儀礼上は海軍大佐と陸軍大佐が同列でも、世間の評価は並ばない。大当たりが小さい分、小当たりは多いのが海の「宝くじ」で、並の水兵は並の兵士より小さな蓄えや小昇進に至る機会が多い。こうした小さな賞への期待が、この職を選ばせる主な理由である。とはいえ、彼らの技能は多くの職工を上回り、日々は常に苦

難と危険に満ちているのに、普通水兵でいる限り金銭的報いは薄く、得られるのは技能を発揮し困難を克服した満足に近い。賃金も、船員賃金の基準を定める港の一般労働者の賃金を上回らない。港から港へ移動するため、グレートブリテンの船員の月給は他職に比べ地域差が小さく、出入りの最も多いロンドンの相場が全体を左右する。ロンドンでは多くの職の賃金がエディンバラの約二倍だが、船員に限ればロンドン発はリース発より暦月で三〜四シリング高いのがせいぜいで、しばしばそれ未満である。平時の商船では、ロンドンの船員賃金は暦月一ギニー（二十一シリング）から約二十七シリング。一方、ロンドンの一般労働者は週九〜十シリングで、暦月四十〜四十五シリングに達する。船員には糧食が支給されるが、その価値が賃金差を常に埋めるわけではない。仮に上回っても家族と分かち合えないため、実入りの純増にはならない。

冒険に満ちた人生の危険や九死に一生の体験は、若者の意欲をそどころか、その職を選ばせる呼び水になりやすい。庶民の母親は港町の学校に息子を通わせるのをためらう。船の姿や水夫の冒険談が息子を海へ誘うと恐れるからである。勇氣や機転で切り抜けれられそうな遠い危険は、私たちにはさほど不快ではなく、賃金を押し上げもしない。これに対し、勇氣や機転を通じない危険を伴う職は別で、著しく不健康・不衛生だと知

れ渡る仕事は賃金がいとも高い。不健康は不快の一種であり、その賃金への影響もこの一般的な枠組みで理解すべきである。

資本の運用先がどこであれ、各部門の通常利潤率は資金回収の確からしさに応じて上下する。概して内国取引は海外取引より不確実性が小さく、海外でも北米貿易のほうがジャマイカ貿易より確実である。利潤率は危険が増すほどいくらか上がるが、その上昇は比例的ではなく、損失を完全には補えない。実際、破産は危険度の高い部門ほど頻繁であり、密輸は当たれば大きな利潤を生む一方で、破産への確かな道でもある。成功への過信が多く、冒険者を危険分野へ誘い込み、競争が利潤をリスク補償に届かぬ水準へと押し下げるからである。真に補償し切るには、通常利潤への上乗せとして、散発的損失の穴埋めのみならず、保険業の利潤に似た余剰をも冒険者にもたらしほどの平常収益が必要になる。だが、もし平常収益がそこまで十分であるなら、これらの商いで破産が他業より多いという事実は生じないはずである。

結論として、賃金を左右する五要因のうち、資本の利潤に影響するのは「仕事の快・不快」と「危険・安全」の二つだけである。快・不快の差は資本の運用先のあいだでは小さく、労働の種類のあいだでは大きい。資本の通常利潤は危険に伴い上がるが、その

上昇は比例せず完全な補償にはならない。ゆえに、同一の社会・地域においては、資本各部門の平均的な通常利潤率のほうが、職種ごとの金銭賃金より互いに近い水準にそろう、現実にもそう観察される。普通労働者と順調に稼ぐ弁護士や医師の所得格差は、どの二つの商業部門の通常利潤格差よりもはるかに大きい。しかも、部門間の利潤差に見えるものの多くは、本来は賃金とみなすべき取り分と利潤の取り分を混同したことから生じる見かけにすぎない。

「薬種商のもうけ」は暴利の代名詞とされがちだが、その見かけの巨利は、多くの場合、妥当な賃金に等しい。薬種商はきわめて繊細で高度な技能をもち、託される信頼も格別で、貧者には医師の役を果たし、富者も急を要せぬかぎり彼に診てもらう。ゆえに報酬は技能と信頼に見合うべきであり、その多くは薬価に織り込まれる。ところが、大きな市場町で最も繁盛する店でさえ、年間の仕入れが三十〜四十ポンドにとどまることがあり、それを三百〜四百ポンドで売れば一見、利幅は十倍に見える。だが実際には、薬価という形で上乘せされた自らの労働賃金が大半を占めているにすぎない。要するに、巨利に見える取り分の多くは、利益の衣をまとった賃金である。

小さな港町では、資本百ポンドの小売雑貨商が年四割〜五割の利回りを得る一方、同

じ町の有力卸売商は一万ポンドを投じて年八〜十パーセントにとどまることがある。雑貨商の商いは住民に不可欠だが、市場が狭く大資本では拡張がきかない。それでも店主は、その職に見合う水準で暮らす必要がある。求められるのは、少額の元手に加え、読み書き・会計の素養、さらに五十〜六十種の商品の価格・品質・最安の仕入先を見極める眼であり、要するに資本さえあれば大商人にもなりうるほどの知識である。この力量への対価として年三十〜四十ポンドは過大ではない。この分を見かけの高利潤から差し引けば、残るのはせいぜい通常利潤にわずかな上乗せがつく程度で、巨利に見える取り分の大半は実は賃金である。

小売の見かけの利潤と卸売のそれとの差は、地方の小都市や農村より首都のほうが小さい。たとえば食料雑貨に一万ポンドを投じうる規模の市場では、小売人の労務分は巨額資本の実質利潤へのごく小さな上乗せにとどまり、資力ある小売人の見かけの利潤は卸売商の利潤とほぼ並ぶ。ゆえに首都の小売価格は一般に安く、ときに地方より大幅に安い。とりわけ食料雑貨は安く、パンや精肉も多くの場合と同程度の価格に落ち着く。雑貨の運送費は都市向けでも村向けでも変わらないが、穀物や牛は遠隔地からの調達比重が高く都市向けは原価がかさむ。したがって雑貨の仕入原価はどこでもおおむね同じ

で、利潤の上乗せが最も薄い大都市が最安となる一方、パンと精肉は都市の原価が高いため、利潤率を抑えても価格は必ずしも下がらず、地方と同水準にとどまることが多い。要するに、市場の拡大は「大資本が動き見かけの利潤を薄くする」と同時に「遠隔調達が必要になり原価を厚くする」。この二つの作用がおおむね相殺するため、王国内では穀物や家畜の価格に地域差があっても、パンと精肉の小売価格は多くの地域でほぼ横並びになる。

卸でも小売でも、首都の利回りは小都市や農村より低いのが通例である。それでも首都では小さな元手から巨財を築く例が多く、地方ではほとんど見られない。小都市や農村は市場が狭く、資本を増やしても取引を同じだけ広げられない。ゆえに個々の利回りが高くとも利益の総額は伸びにくく、年々の蓄積も増えがたい。これに対し大都市では、資本の増加に応じて商いを拡張でき、儉約・実直・用心に励む者ほど信用が資本以上の速さで増す。商いは資本と信用に比例して広がり、利益の総額は商いの規模に、年々の蓄積は利益に応じて増える。とはいえ、大都市でも既成の一業のみで急に巨富を得るのは稀で、多くは長年の勤勉・儉約・注意深さの積み重ねの所産である。急な成金は、ときに投機から生まれる。投機商は定まった看板を持たず、或年は穀物、翌年はワイン、

その次は砂糖やタバコ、茶へと渡り歩く。平均を上回る利回りが見込めれば参入し、利回りが相場並みに戻ると見れば撤退するため、その損益は特定業種の損益とは連動しない。大胆な者は二、三度の成功で大きな財を得ることもあれば、二、三度の失敗で同じだけ失うこともある。かかる商いは、広い取引と通信により情報が集まる大都市でしか成り立たない。

前掲の五要因は、賃金や資本の利潤に大きな差をもたらす一方で、労働や資本の各職に伴う総合的な得失（現実的・主観的の両面）には差を生じさせない。というのも、ある職では小さな金銭的不利を補い、別の職では過大な利得を相殺するからである。

もともと、得失の合計が釣り合うには、自由が徹底した社会においてさえ三条件が要る。第一に、その職が地域社会でよく知られ、長年にわたり確立していること。第二に、その職が常に通常、すなわち自然な状態にあること。第三に、従事者にとってそれが唯一、もしくは少なくとも主要な生業であること。

第一に、こうした均衡が実現するのは、その地域で広く知られ、古くから確立した職業に限られる。

他の条件が等しければ、賃金は旧来の業より新しい業のほうが高くなるのが通例であ

る。新たに製造業を起こす者は、他の仕事から職工を呼び込むため、元の職の賃金や職務に見合う水準を超える高給を提示せざるを得ず、賃金が相場並みに落ち着くまでには時日を要する。流行や嗜好に頼る製品の需要は移ろいやすく、長く続いて「老舗の製造業」になることは稀である。これに対し、用途や必需にもとづく製品の需要は安定しており、同じ形や製品が幾世紀にもわたり求められることがある。このため、前者の分野の賃金は後者より高止まりしやすい。バーミンガムは主として前者、シェフィールドは主として後者で知られ、両地の労賃もその性格差に応じていると言われる。

新しい製造や商業の分野、農業の新手法の立ち上げは、常に投機であり、発起人は自ら特別の利益を期待する。利益は時に極めて大きいが、そうならぬことも多く、周囲の既存業の利益と一定の関係はない。企てが成功すれば、立ち上がり期の利益はたいへい非常に高い。ところが、その事業や手法が確立して広く知られるに及べば、競争によって利益は他業並みの水準へと均される。

第二に、労働と資本の利害の均衡は、各職の雇用が通常、すなわち自然な状態にあるときにのみ成り立つ。

ほとんどの職で労働需要は平常から増減し、需要が強いとその職の利得は相場を上回

り、弱いと下回る。農村労働では乾草作りや収穫期に需要が膨らみ、賃金も上がる。戦時には、商船の水夫が国王の艦隊に四〇五万人ほど徴発されて商船は人手不足となるため、月給は平時の一ギニー（二十七シリング）から四十シリング（三ポンド）へ跳ね上がるのが通例である。これに反し、衰退局面の製造部門では、職替えを避ける職工が多く、その職務の性質から見て相応とされる水準より低い賃金にも甘んじがちである。

資本の利潤は、投資対象商品の価格に連動する。相場が平均を上回れば、市場に出すために用いた資本の一部は通常以上を稼ぎ、相場が下がれば利潤も削られる。価格はあらゆる財で動くが、その振れ幅は品目によって異なる。人が作る財では労働投入が需要に合わせて配分され、平均的な年産は平均的な年消費に近づくため、麻布や毛織物の価格の揺れは、喪服需要で黒布が高くなるといった偶発的な変化に限られがちである。これに対し、穀物・ワイン・ホップ・砂糖・タバコのように、同じ労働でも年ごとの収量が大きく変わる品では、需要のみならず数量の大きく頻繁な変動にも左右され、価格は極めて不安定となる。ゆえに、こうした品を扱う一部の商人の利潤も相場に合わせて大きく振れ、いわゆる投機商は主としてこれらを対象に、値上がりを見込めば買い集め、値下がりを見込めば売り抜ける。

第三に、労働や資本の各職における損得の均衡は、その職が従事者にとって唯一、もしくは少なくとも主要な生業である場合にのみ実現する。

生活の糧のある仕事に頼っていても、それが日々の多くを占めない者は、手が空けば副業に就き、その副業の相場より低い賃金にも応ずることが多い。

スコットランドには今も、かつてほどではないが「コッター」「コテージャー」と呼ばれる人びとがいる。彼らは地主や農場主に仕える外雇いの労働者で、主から住居と台所用の小さな菜園、牛一頭分の草地、場合によっては一―二エーカーの痩せた耕地が与えられる。主が人手を要する時期には、週に二ベックのオートミール（約十六ペンス）の支給が加わる。しかし一年の大半は主からの仕事が乏しく、自前の小作地の耕作だけでは時間が余るため、人数が多かったころには、その余暇をきわめて低い対価で提供し、一般労働者より安い賃金で働くのが常であった。こうした仕組みは、耕作が遅れ人口も希薄だった古い時代の欧州各地で一般的であり、農繁期に集中して必要となる多数の手を確保する有効な手立てであった。当時、彼らが日給・週給で受け取る金銭は対価のすべてではなく、住居や小作地の給付が大きな部分を占めた。それにもかかわらず、古代の賃金や物価を集めた記録の多くは、この金銭分だけを全額と見なし、賃金も生活必需

品の価格も驚くほど低かったかのように描いている。

副業で作られた品は、本来の性質からすればもっと高く売れてよいのに、実際には割安に市場へ出ることが少なくない。スコットランド各地では、靴下が織機製よりはるかに安く編まれており、作り手の中心は他の仕事で生計を立てる使用人や労働者である。

毎年、シェトランド産の靴下が千足以上リース（エディンバラ港）に入り、一足五〜七ペンスで取引される。他方、同諸島の小都ラーウィックでは、一般労働の日当はおよそ十ペンスとされる。しかも、同じ島々では梳毛糸の高級靴下が一足一ギニー（＝二十一シリング）以上で編まれることもある。

スコットランドでは、亜麻糸（リネン糸）の紡ぎは靴下編みと同様、もともと別の職務で雇われた使用人が主に担ってきた。いずれか一方だけに頼って暮らすとすれば、収入はごくわずかにとどまる。各地では、週に二十ペンス稼げれば「腕のよい紡ぎ手」と見なされる。

豊かな国では市場が広大で、通例は一つの職だけで従事者の労働も資本も吸収できる。他方、本業で暮らしながら副業でわずかに稼ぐ働き方は、主として貧しい国に見られる。ところが、欧州随一に家賃が高いロンドンのような非常に富裕な国の首都でも、これに

似た現象がある。ロンドンの家具付き貸間は欧州諸都の中で最も安く、パリよりも、同等の質ならエディンバラよりも安い。その安さの理由は、逆説的に言えば高家賃そのものにある。ロンドンの高家賃は、高い賃金や遠隔地から運ぶ建材費、何より地代の高さに、家長が同じ屋根の下の家全体を一棟借りる慣習が重なって生じる。地主は独占的に振る舞い、ときに町の痩せ地一エーカーに田舎の最良地百エーカー以上の地代を求め、英国で「住宅」は一つ屋根の下の全体を指すが、フランスやスコットランドでは一階分を指すことも少なくない。ロンドンの商人は顧客の界限で一棟を借り、地階を店、屋根裏を家族の寝所とし、中層の二層を下宿として貸して家賃の一部を相殺する。彼の生計の柱は下宿料ではなく本業である。他方、パリやエディンバラでは貸間業がほぼ専業で、宿代で家賃のみならず家計全体も賄わねばならない。